



2019.4.20

Vol. 59

北海道サケ ネットワーク Newsletter

発行 阿部周一

事務局 木村義一 札幌サケ協議会
〒004-0022

札幌市厚別区厚別南 7 丁目 18-19

Tel/Fax: 011-894-0081

E-Mail: giichiketa@yahoo.co.jp

URL: <http://salmon-network.org/>

編集 寺島一男

E-Mail: tera2112@potato.ne.jp

桜前線が札幌まで北上し、北海道も本格的な春を迎えました。発足 13 年目を迎えた本ネットワークの総会とサケ会議が別掲のように開かれます。サケと人類の未来を考える国際サーモン年でもあります。このイベントを機会に、サケに関する様々な声を聞かせて下さい。また情報の提供もお願いいたします。(編)

INFORMATION



北海道サケネットワーク総会

2019 年度の総会を、下記のように開催いたします。会員の皆様のご出席をお願いいたします。例年のように、総会后、北海道サケ会議、交流会を予定しています。併せてご参加下さい。

1. 日 時：2019 年 5 月 18 日 (土)
2. 会 場：札幌エルプラザ 2 階環境研修室 1・2 (北区北 8 条西 3 丁目)
3. 日 程：
 - ①役員会 12:15~12:45
 - ②総会 13:00~13:45
 - ③北海道サケ会議 14:00~17:00
 - ④交流会 17:30~20:00
(希望者のみ。会場：エルプラザ地下「山わさび」会費 4000 円)
4. 参加費：無料
5. 総会議題：
 - ①2018 年度活動報告・収支決算報告・監査報告・会員現況報告
 - ②2019 年度活動計画・収支予算承認
 - ③役員承認
 - ④会員 (法人・団体) からの活動報告
 - ⑤その他

- ◎交流会に参加される方は、事前に出欠をお知らせ下さい。(会費は当日)
- ◎サケネットワークの担当者に変更がある場合は、新担当者の職・氏名・連絡先 (eメール・電話番号) を事務局までお知らせ下さい。

北海道サケ会議の概要

1. テーマ：国際サーモン年～サケの生産と私たちの暮らし
2. 趣 旨：気候変動下におけるサケ類資源の回復と持続的利用に関する国際共同プロジェクト「国際サーモン年」の実施年に当たり、私たちのくらしや地

域において社会的、文化的、経済的に多くの恩恵をもたらしているサケ類の多面的な価値について理解をさらに深めることを目的として、サケ類の資源と生産の現状や課題、さらにその流通や消費などにおける問題点を整理する。

3. 講 演：

- ▶「国際サーモン年の紹介とサケマス資源の展望」(仮題)
本多健太郎 氏 (水産研究・教育機構北海道区水産研究所サケマス資源研究部)
- ▶「海洋環境変動とサケマス資源」(仮題)
上野洋路 氏 (北海道大学大学院水産科学研究院海洋生物資源科学部門)
- ▶「サケマス養殖の現状と課題」(仮題)
小出展久 氏 (北海道立総合研究機構)
- ▶「漁業経済から見たサケマスの流通と消費の課題」(仮題)
宮澤晴彦 氏 (北海道大学大学院水産科学研究院海洋生物資源科学部門)



EVENT NOW

2019 サケ出発式・カムイノミ

「大雪と石狩の自然を守る会」と「あさひかわサケの会」が主催する、第 36 回サケ出発式・カムイノミが、3 月 31 日 (日) 旭川市内を流れる忠別川ツインハープ橋下流河畔で行われました。

チカップニアイヌ民族文化保存会が執り行うカムイノミの後、170 名の市民の声援に送られて、約 5000 尾の稚魚が元気に旅立ちました。



加盟団体紹介



札幌市豊平川さけ科学館

札幌市豊平川さけ科学館 (以下、さけ科学館) は、札幌市内を流れる豊平川にサケを戻そうと起こったカムバックサーモン運動がきっかけで建てられ、今年で開館 35 年を迎えます。

サケ稚魚の放流のほか、サケ観察会や採卵実習、川の魚とりなど、市民に水辺の生物への理解や関心を深めてもらうための活動を続けています。

豊平川には、秋には毎年 1000 尾以上のサケが遡上し、自然産卵しています。近年の調査で、豊平川の遡上するサケの半分以上は自然産卵生まれの野生魚であることが明らかになり、豊平川の環境に適した野生魚を増やす取り組み (札幌ワイルドサーモンプロジェクト SWSP) が、研究者、河川管理者、コンサルタント業者、有志の市民らによって進められています。

さけ科学館は、市民主導のサケ保全活動が発展するよう、SWSP 事務局として尽力しています。(有賀)



【所在地・開館時間】

〒005-0017 札幌市南区真駒内公園 2-1

開館時間…9:15~16:45

休館日…毎週月曜日 (祝休日の場合は次の

平日)・年末年始 (12/29~1/3)

入館料…無料。駐車場は平日・冬期間無料

4/29~11/3 の土日祝日休館



サケ TOPICS

サクラマスとわたしたち — その1 —

河村 博

これからしばらくの間、アジア特産のサケのなかまでであるサクラマス（学名：オンコリンカス マソウ *Oncorhynchus masou*）の生い立ち、くらしぶり、いのちのつながり、そして、わたしたちのくらしと生き様との関わりなどについて、ご紹介しようと思います。

まず、私とサクラマスの関わりから始めることにいたします。私の生まれ故郷は、北九州の旧門司市（現在の北九州市門司区）で、小山に川が流れ、水田やため池がつくられた、少し前までの我が国の田舎風景が目にかぶ、ごく普通の土地でした。

子供のころから虫や花、生き物が好きで、特に魚（淡水魚）に興味を惹かれました。そのころの川や池には、フナ、ドジョウ、コイ、ハヤ（ウグイ）、オイカワ、アブラハヤ、メダカ、タナゴがくらししており、網ですくってきた魚をトライに水を張って飼育し、観察するのが大好きでした。

今ではタナゴの類は多くが希少種になってしまいましたが、当時でも大型（と言ってもせいぜい6 cmほど）の成魚を多数つかまえることは難しく、ある冬に近所の兄貴分につられて、たまたま湧き水がしみだしているたまりに、頭を円形に並べてじっと動かない大型タナゴを一度に10数尾つかまえたことがあります。小躍りするぐらい嬉しかったのと、盛夏とは異なる真冬のタナゴたちの行動の不思議さに、子どもながら感動したことを覚えています。

小学校高学年から高校まで、大阪に移り住みました。ここでは主に蓮池でくらす淡

水魚に巡り会いました。筆頭はモツゴ、モロコ、フナで、初めてタウナギやタイワンドジョウ（カムルチー）に出会い、山上の大池ではワタカやヒガイも目にすることができました。

これらは、主にすくい網ではなく釣りで捕まえ、生かして持ち帰り、すべて水槽で飼育観察しました。特に、今は禁止されていますが、大阪城の濠で引っ掛け釣りで捕獲したタイワンドジョウ幼魚を、水槽で飼育した経験は貴重なものでした。

餌は生きた小魚たちで、さなぎ粉をまぜたメリケン粉（小麦粉）をモンドリ（セル瓶：捕獲器）に入れ、においにひかれて侵入捕獲した小魚を与えました。その多くは外来種であるタイリクバラタナゴが主体でした。モンドリの採集効率、セル瓶の置き方、すなわち入り口の部分を池の深み方向に設置するのがコツでした。

タイワンドジョウの飼育で学んだことは、飼育水に小魚を投入するや否や、かれらが固まってしまうことでした。じっとしてまったく動きません。胸鰭を小刻みにせわしなく動かす様子は、極度の緊張状態をあらわしています。

なぜ、かれらは立ちどころに危険を察知できるのでしょうか。答えはどうやら古くなった飼育水中にありそうでした。捕食者であるタイワンドジョウの体表粘液、あるいは排泄物などが水に溶け込み、におい物質として存在し、それを被食者である小魚が感知することで、捕食者回避の行動として行動が停止したと考えました。

自然状態では、これにより捕食者の目をあざむくことができるかもしれませんが、狭い水槽内ではそうはいきません。事実、タイワンドジョウは水中に小魚が投入される音や衝撃を感知して、餌探索の行動に移ります。こうして小魚の運命は決まります。これではフェアなやり取りとは言えません。この飼育は数ヶ月で終わりを告げました。

さて大学進学は、好きな水産系を選び北海道にわたることになりました。ここからいよいよ私とさけます、特にサクラマスとの関わりが始まります。

（北海道サケネットワーク顧問
・元北海道立水産孵化場長）

連載

さけア・ラ・カル・ト
(その5)

サケを寝かせる技術



長い眠りから目覚め、いよいよ川に泳ぎ出した稚魚は、急流に逆らって泳ぎながら餌を捕らなければならない。川水は冷たく、いつ魚や鳥に襲われるかもしれない。まだ泳ぎもままならない稚魚たちにとって多くの仲間が犠牲になる試練の時期だ。

川に泳ぎ出すまでに少しでも大きく育てていることは、その危険から逃れるためにとても重要なことだ。大きく育てためには、ふ化してから砂利を出すまでに、お腹の袋の栄養をどれだけ効率よく「成長エネルギー」に使うかにかかっている。もしその間に動き回ると、栄養が「運動エネルギー」に使われ、成長が阻害される。

長いふ化事業の中、1950年半ばからの研究体制強化で、画期的な「増やす技術」の開発が始まった。新しい知見を基に、あらゆる面で技術や設備の開発が行われたが、お腹に袋を持つ時代の「稚魚を寝かせる技術」もその重要なひとつであった。自然界では初期の成長の差を取り戻すことはほとんど不可能だからだ。

人工ふ化では、卵がふ化し泳ぎ出すまで砂利を敷いた池に収容する。この池で稚魚を寝かせなければならない。「稚魚を寝かせる池」を作ることは、簡単に見えて実は大変なことなのである。

稚魚は流れを感じると泳ぎ出す。一尾が泳ぐと流れが生じ、次々と伝播し「眠れない池」になってしまう。といって、水の量を極端に減らすと窒息する。

この反する条件を同居させるために試行錯誤の実験が重ねられ、まず、池づくりから始めることになった。「そんな池を作ることは無理だ」と横を向く土木技師を何とか説得してつくりあげた池は、長さ30m、高低、凹凸の誤差は5mm以下の平滑な池である。それに砂利や、新素材の工夫を重ね、ようやく今日の「寝ている池」が完成したのである。

ふ化事業は長い間、その努力にもかかわらず効果の上がらぬまま、80年の歳月が過ぎた。その取り組みに転機が訪れ、新たな研究の進展によって技術の改革が進み、1972年からサケの資源は順調に増大した。その時代に技術開発を手がけ、試行錯誤の末に効果が上がったことに大きな喜びと誇りがある。

だが、ふっと気持ちをよぎるのは「サケは野生」との思いである。人工ふ化でどんなに手を尽くしても、やがて自然に託すべきサケであり、神秘的な自然のしくみに、どれだけ叶っているのかとの思いがつかまとうのである。サケ資源維持のためにふ化事業まんとうに見えるこの成功の陰で、重く沈むような思いもあるのである。

(G)

